これまでの取り組みを見つめてみよう

特集

あらためて考える アクティブ・ラーニング

今回は、「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）」の意義や学習指導要領改訂の背景について、文部科学省教育課程企画室に取材。また、実践例として、秋田大学教育文化学部附属小学校での取り組みをご紹介します。

文部科学省初等中等教育局教育課程課
教育課程企画室長

大杉 住子さん

Sumiko Osugi

1997年文部省（当時）入省後、学術国際局、国連教育・科学・文化機関（ユネスコ出向）、大臣官房国際課国際協力政策室、高等教育局、初等中等教育局を経て2007年より愛媛県教育委員会保健スポーツ課長。以後、生涯学習政策局政策課、在イタリア日本大使館、高等教育局高等教育企画課を経て現職。

取材・文●甲斐ゆかり（サード・アイ）、金丸敦子　イラスト●あきんこ

▼よく耳にする「アクティブ・ラーニング」という言葉。学習指導要領改訂案（平成二十九年二月十四日公表）では、「主体的・対話的で深い学び」と示されていますが、まずはその意義について誤解のないようにしておく必要があります。そこで、次期学習指導要領の改訂作業を担当された、文部科学省の大杉住子さんにお話をうかがいました。

日本の学校教育のよさを新しい時代に生かすための新学習指導要領です

今回の答申、改訂案は、今まで全くなかったことを一から始めようという提案ではなく、今まで積み重ねてきた日本の学校教育の「よさ」を、次の新しい時代にどう生かしていけるかを議論したものであり、実際にその蓄積が生かせることを再確認できる内容になっています。

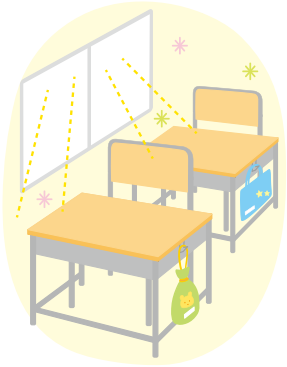
中教審では、「私たちはなぜ学校という場で学ぶのか」ということを根本から議論していただきました。

これからの社会は、グローバル化や情報化などの変化のスピードがますます加速度的になっていくことが予想されます。その結果、子どもたちが大人になるころには、今では想像もつかないような社会になっているかもしれません。はたしてそのとき、学校で学んだことは本当に役に立つのか――？　今まさに、学ぶことの意義が根本的に問われる時代が訪れています。

そんな中、学校教育は、時間が経てばさびついて役に立たない知識を教えているわけではなく、一生涯にわたって通用するような力や学力を子どもたちに身につけさせているということを、共通の認識としてもつ必要があります。日本の学校教育はそれに対する豊富な実践の蓄積があり、国際的にも評価されてきました。

そうは言っても、日本の子どもたちにも、課題がないわけではありません。社会参画への意識や、学んだことを自分の生活や社会に生かしていこうという意欲、激しく変化する社会の中で、自分で情報を取り入れながらまわりの人と協力し、問題を解決していく力。これらは、今後も検討が必要です。

次期学習指導要領では、これからの時代に直面するこのような教育上の課題に、日本の学校教育のよさをどう生かしていくかを議論し、日本の学校教育を、いかに時代が変化しても通用するものとして改めて意義づけています。そのような視点で見ていただくと、先生方にとっては、「今まで当たり前にやってきたものだが、こういう意義があったのだな」と、小学校教育の意義を再確認いただけると思います。



※「アクティブ・ラーニング」という語は様々な捉え方があり得るため、告示という法令形式の文章である学習指導要領改訂案では、中教審答申を踏まえ「主体的・対話的で深い学び」の語を用いています。

先生方自身がアクティブに学び続けていくための、授業改善の視点それが「アクティブ・ラーニング」

主体的・対話的で深い学び

意識しておきたい 3つのポイント

1 カリキュラム・マネジメントを意識する

●自分自身の取り組みが教育課程全体でどんな位置づけになっているか、教科や地域の課題に照らし合わせてどんな役割になっているかを意識しながら授業改善を図っていくことが大切です。

2 小学校「前」「後」も意識する

●子どもたちの学びは、義務教育の段階からではなく、実は幼児教育から始まっています。幼児教育の成果を小学校のスタートからどうつないでいくか、また中学校へどうつなげるか、各段階のつながりもぜひ意識してみましょう。

3 実践例を多く知る

●校内研修や外部の研究会に積極的に参加するほか、自分なりの情報源を複数もっておくのも有効です。例えば「次世代型教育推進センター」のホームページで紹介している、全国の授業例なども参考になります。

➜もっと理解するために

学習指導要領改訂の方向性について、大杉さん自らが解説する映像資料がYouTubeで視聴できます。通勤の合間に視聴したり、研修などで資料と合わせて利用したりすることで、より理解が進みます。ぜひ試してみてください。コンパクトバージョンもあります。

https://www.youtube.com/watch?v=1F4vye6XSTw

教科の特質や子どもの状況に合う学び方を創意工夫し追究するのが教師の役割

「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）、以下ＡＬ」についてどう考えるかは、先生方からの質問も多いところです。

まず知っておいていただきたいのは、ＡＬを実現するのに特定のやり方があるわけではないということです。次期学習指導要領では、ＡＬを、先生方が教職という職業を懸けて創意工夫し、追究していただく授業改善のための「視点」であると示しています。

では、なぜ授業改善や指導方法の改善が重要なのでしょうか。

変化の激しいこれからの社会に生きる子どもたちには、学んだことを人生や社会で生かせるようにしっかりと理解し、資質・能力として身につけていくことが必要になります。そのためには「どのように学ぶか」が重要であり、学習過程の質を改善していく必要があります。そこで、ＡＬの視点が必要だという議論になっているのです。ＡＬは、学習活動を変えることそのものが目的ではなく、子どもたちに資質・能力を育んでいくためのものです。これをしっかり意識していただくことが重要です。

また、ＡＬは特定の「型」ではありません。「主体的・対話的で深い学び」のありようは、子どもたちの状況によって変わります。教科の特質や扱うテーマ、身につけさせたい力などを踏まえ、いろいろな指導方法を視野に入れながら、更なる改善を図っていくことが極めて大事だと思います。

言語活動や理科の探究的な学び、社会科の調べ学習など、小学校の先生にとって、ＡＬの視点に立っての授業改善は、実はこれまでかなり実践されているはずです。今までやってきたことの質をさらに高め、それがどんな資質・能力につながるかを意識して改善を図っていただくと、よりスムーズだと思います。

先生方自身がアクティブな学び手に！

これからの子どもたちは、変化し続ける状況の中で、様々な人々と協力しながら最善の解を導き出し、それを積み上げていく力が求められます。そんな力を身につけていく授業はどんなものかと考える時、先生方自身にも、変化する社会の状況をしっかり受け止めながらも、子どもの状況に応じた最善の指導の在り方を追究し続けていただきたいと思います。日本の学校教育には、元々授業研究の文化があります。「これが正解だ」と歩みを止めず、常にいいものを取り入れて充実させていく意識の高い職業、それが教師ではないでしょうか。その営みの中に、ぜひ今回の視点を取り入れてほしいです。いつの時代も変わらない、全ての基盤となる力を身につけていくには――？　常にそれを考えながら、アクティブに学び続けていただきたいと思います。

PROFILE

秋田大学教育文化学部附属小学校

明治７年設立。秋田師範学校附属小学校を経て現在に至る。2016年度の児童数は549名、学級数18クラス、教職員数46名。クラス担任のほか、国語、算数など、学年によって専科の教師が授業を行う教科もある。

すぐにお手本にしたい秋田県での実践

「秋田の教育はすごい」という評判は、学校関係者なら誰もが知るところ。今回は、実際の授業の取材が実現しました。

4年 国語「詩を楽しもう」

POINT **「対話」しながら考えを深める**

COMMENT

菅野宣衛 先生

子どもたちが自分で考え、判断し目標に到達することを目指す

本校の授業では、一人で考える個人的な思考と、みんなで考える協働的な思考の場面を行ったり来たりしながら、一人ひとりの理解度や表現の質を高めていくことに重点を置いています。対話や表現といった活動は、学びを充実させるための「手段」であり、「目的」ではありません。実際に、今日の授業で子どもたちの思考が最もアクティブになったのは、考えることに行き詰まり、一瞬しんとなった場面でした。

次は何をすればいいかを教師がずっとガイドする授業は、カーナビつきの車を運転しているようなもの。目的地にはたどり着くでしょうが、主体的に判断する力は身につきません。途中で迷っても、自力でたどり着けるようになることが大事なのです。考えていく過程で困ったときも、グループやペアの対話が必要か、どれぐらいの時間が必要かなど子どもたち自身が判断する機会を大切にしています。

従来の授業が行程の決まったバスツアーだとすれば、対話型の授業は、目的地までの行き方を自分で決めるカスタムツアー。そんなツアーにはハプニングがつきものです。したがって、その時間にいちばん教えたいことは何か、1回の授業で取り組む学習課題をいかに絞りこめるかもポイントになるでしょう。

①用いる題材は、工藤直子さんの２つの詩。まず、ありんこたくじ（蟻）が書いた設定の詩を読み、どの生き物が書いたものかを考えてみます。読み取る手がかりをつかんだら、今日の本題の詩「あいさつ」を読みます。

②「あいさつ」の詩の中で気になる言葉として、様々な意見が。子どもたちに「課題は何にする？」と問うと、「この詩をつくった生き物をつきとめよう」になりました。グループごとに、犬、ヘビ、トカゲ、ヤモリなど、予想を発表し合います。

③その生き物だと判断した根拠となる言葉を挙げていきます。「しっぽが『ハキハキ』とあるから犬だと思う。ヘビだったら『にょろにょろ』じゃない？」という意見に対して……。

④詩の中の「ぼく」とは誰かという疑問が出てきました。「ぼく」と「しっぽ」は別なのか、隣と相談。

⑤「ぼく」と「しっぽ」がどれくらい離れているのかを、ビニールテープを使って実演してみます。ところで「ぴんぴん」って、どういう感じ？

誰かが国語辞典を調べて、「健康で元気という意味がある」と発言。ビニールテープを振って確かめてみました。

⑥長さがわかる表現はどこか、当てはまる言葉を囲みます。「おおい」「元気かあ」と呼びかけるのは、距離が遠いからです。

⑦ここで、みんなで考えた答えを確かめます。「ヘビ」でした。ヘビの気持ちになって、詩を朗読します。

⑧最後は拍手。授業終了です。

今回見せていただいたのは、低・中・高のそれぞれの学年帯の授業。研究会用ではなく、日常的に実践されている、「いつもの」授業です。秋田県では、先生方の授業研究が盛んで、それゆえ、どの学校でも同じように練られた質の高い実践が行われています。

附属小では、ALを「課題解決に向け、主体的な思考と協働的な思考を往還させながら、学びの質を高めていく学習活動」と位置づけ、一人ひとりの理解度や表現の質を高めていくことに最大の重点を置いています。そこで重視しているのが「対話」です。とはいえ、たんに言語的な表現だけを対話とせず、身体的な表現や文章に書くこと、算数の数式や図工の色や形など、相手に自分の考えを伝える手段の全てを含んでいます。

この３つの授業の実践からは、それぞれの学年と教科の実状に即した「対話」への取り組みが非常によく表れていました。

2年 算数「かけ算を使って考えよう」

POINT 子どもの気づきを引き出す

COMMENT

堀井綾子先生

教えるのではなく、子どもたちの学びを「引き出す」のが教師の役割

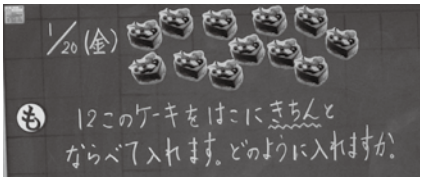
「対話」を取り入れた授業を展開していく中で、次第に子どもたちから、困ったときは「グループで話し合いたい」という声が出るようになってきました。友達と話し合えば解決したり新しい考えが生まれたりすることを体感し、話し合うことの良さが低学年なりにわかってきたようです。

対話をすると子どもの気づきが出てきます。それを教師が補い、子どもたちの学びを引き出すには、教室を回って細かく目を配り、的確にヒントを与えたり、次の展開を考えたりする必要があります。

そのベースが教材研究です。本校では授業のねらいにあわせて何をどんな場面で教材として扱うかを決めます。場合によっては教科書以外の教材を用いることもあります。また、単元を入れ替えたり、2単元を一緒にしたりして、授業のねらいに沿った柔軟な授業づくりをしています。

ねらいの達成のためにどんなしかけをしていくのか、どこで「対話」を取り入れると思考が深まっていくのか、教材研究の大切さを感じながら実践に取り組む毎日です。

①今日は、「かけ算」の単元が終わった後の発展的な内容です。導入として、１２個のケーキを箱に「きちんと」並べて入れる方法を考えます。



②ケーキをおはじきで代用して考えてみましょう。「何分ほしい？」との呼びかけに子どもたちから「５分」の返事が。おはじきを並べたり、直接ノートに書いたり。

③子どもたちが考えた並べ方を、あらかじめ用意してあるマス目を引いた紙に書いてもらい、黒板に貼っていきます。「並べ方を算数の言い方で言えるかな？」子どもたちに相談させ、「図としきをつなげて考えられるかな？」今日の課題が決まります。

④グループで話し合って式の形にしていきます。

⑤続いて、「２×３×２」の並べ方を図にしてみます。

⑥さらに、他の並べ方も相談。

⑦最後に、「まとめ」を行って授業終了です。
「図⇔しき　いったりきたりできる。しきは便利！」

5年 国語「詩」の技法を味わう

POINT みんなで学ぶことで学びの質を上げる

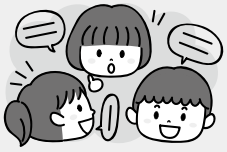
COMMENT

小室真紀先生

子どもたちが他の子の意見を聞きたくなるしかけを作る

話し合うとは、ただ意見を言うのではなく、自分の考えと仲間の考えの似たところ、違うところを見つけ、考えをすり合わせることが大切です。そのためには、子どもたちが人の意見を聞きたくなるタイミングで話し合うことが大事だと思います。また、誰もが考えられる要素があり、意見を出しやすい素材であることもポイントです。「とにかく話し合わせれば意見が出てくるだろう」というのは間違いで、他の人とすり合わせたい素材がある時こそ、話し合いが盛り上がります。

今日の授業では、最初に絵を描かせ、根拠となる表現を探すところで対話を取り入れました。話し合いをすることで気づきの質が上がり、「みんなで学ぶといいことがある」とわかる。授業づくりでは、そういうしかけが大切だと思います。



①題材は、まど・みちおさんの詩「イナゴ」を用います。詩の中に登場するイナゴの目には、どんなものが見えているかを、略図を使って１分で描いてみます。さあスタート！

②イナゴの目に見えているものは、いくつかの案に分かれました。「夕焼け」と「ぼく」どちらを見ているんだろう？　という先生の質問。

④比喩表現や、漢字とひらがなの表現の強弱にも気がつきました。

③発表は、「見ている」と「見えている」の違いについて発展。「意識して見ようとしているのが『見ている』じゃない？」という意見が出ます。

⑤ぼく「しか」見ていないという「限定」や、余韻を残す「…」にも意識が向きます。

⑥詩を読んでいくうちに、どんどん気になる表現が出てきました。気になる表現を、国語辞典で調べてみます。

⑦「ぼく」はイナゴを捕まえようとしている？　意見がどんどん出てきます。この後「もっと気がついたところがある」という子どもたちからの声を受けて、さらにもう１時間授業を行うことになりました。

最後に、秋田大学教育文化学部教授で、秋田県学力テストの検証改善委員会委員長を務める阿部昇先生にお話をうかがいました。

阿部 昇 先生
Noboru Abe

秋田大学大学院教育学研究科教授。専門は教育方法学、国語科教育学。日本教育方法学会常任理事、全国大学国語教育学会理事、日本NIE学会理事。「読み」の授業研究会代表。秋田県検証改善委員会委員長。

先生方が共同で教材研究に取り組むことがアクティブ・ラーニングの実現につながります

ALの成果を評価するには明確な基準をもって記述させること

次期学習指導要領では、育成すべき資質・能力が3つにまとめられています。この中でポイントとなるのが、「思考力・判断力・表現力等」です。

これを評価するには、教科を問わず、子どもたちに書かせてみるのがよいと思われます。しかし、ただ書くこと自体が目的ではありません。大切なのは、教師側が明確な評価基準や観点をもつことです。

例えば、国語の「物語・小説」の場合、読める子は、どういうところに目をつけるとより面白く読めるかを無意識にわかっています。しかし授業では、読めない子にも、作品の構成や構造、しかけ、伏線、レトリックをしっかりと気づかせなければなりません。そうして、先生や友達の助言をもらいながら、どの子も主体的に自分の力で読み解いていけるようにすることが評価の前提となります。

そのうえで、導入部の人物設定がどのように作品に生きているか、具体例を挙げて書かせてみる。作品をどう読んだか、どう評価するかを書かせれば、子どもたちがどのくらい読めているのか、読む力がついているかがわかると思います。

さらに、授業で学んだことを応用できることも大事です。それには、別の作品で試してみるとよいでしょう。単元ごとに時間を取ることは難しいかもしれませんが、重要な単元で実践してみて、子どもに「できた、うれしい」と体感させることが必要かもしれません。

授業の質の向上に不可欠な教材研究は、共同研究を活用

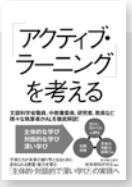
秋田県の「探究型授業」は、ALをかなりの程度先取りしたものです。先生方は子どもたちにどういう力をつけたいか、目標・ねらいを具体的に把握していますし、授業展開のイメージもできています。ですから一部の子どもだけが活躍する授業ではなく、全ての子どもが自分で考え発言できるようにしていきます。一人ひとりが学びの主体であることを保障する授業ができているのです。

ALは「言語活動の充実」を発展させたと言える部分があり、グルーピングすることで内言の外言化（自分の考えを外に向かって表現する）のチャンスが増えます。しかし、何のために話し合いを行うかの戦略が教師側にないと、活動ばかりが表に出て、名ばかりのものになりかねません。

ALを授業のグレードアップのチャンスとするには、やはり教材研究の力が必要です。先生方はみなさん多忙ですが、秋田県の先生方は共同研究を行うことで時間を節約し、授業のレベルアップを図っています。

たとえ30分でも集まって話をすれば、自分一人では出てこなかったアイデアが出てきます。課題の出し方、助言の仕方など、異なる視点からの意見は有効です。教材研究では、「教師同士がALを行うこと」をお勧めします。

さらに深く知るには



「アクティブ・ラーニング」を考える
（教育課程研究会／東洋館出版社）

●なぜ「アクティブ・ラーニング」なのか。求められる社会的な背景と日本の教育が目指すべき方向性を示した1冊。学習指導要領改訂に関わった50名余りの専門家が寄稿しています。

「アクティブ・ラーニング」を生かした あたらしい「読み」の授業
——「学習集団」「探究型」を重視して質の高い国語力を身につける
（「読み」の授業研究会編／学文社）

●国語の「読み」の授業について、ALを生かした授業を提案。指導のポイントが授業記録と共に提示されています。阿部先生も著者として参加されています。